

口で弓を引き



50先の的を射る



狙うは金メダル



矢が厚い木の板を貫通——。こども記者6人が7月25日、文京総合体育館3階弓道場で、東京2020大会での優勝を目指すパラアーチェリー選手の永野美穂さんに取材しました。



口で弓を引く永野美穂選手



永野選手（右から3人目）と写真撮影するこども記者

結果よりも
努力が大切

パラアーチェリー 永野美穂選手インタビュー

今できることを

心の支えは「応援してくれるいろんな人」です。一生懸命、頑張る人には人が集まってきて、つながります。「頑張っていたら応援したい」と自分でも思うから、頑張ることができる、と言っていました。来年の東京2020パラリンピックに向けて「ロンドンでは5位で表彰台に立てなかったため、今回は一番良いメダルをとりたい。後で後悔しないために今できることをしっかりする」と心構えを語りました。（小6 / 川真田千偉子）

正直になる

永野選手は「点を気にしていると、大切なことを忘れてしまいます。結果よりもそのために起こった努力の方が大切」と、パラアーチェリーを楽しむことを心がけています。どのようになら打つか、打とうか、打ちたいか。いいときも悪いときも正直になることを大切にしている永野選手。東京2020パラリンピック競技大会での金メダルを目指しています。（小6 / 久保社太郎）

集中し楽しめる

永野選手は自分のできるスポーツを探していて、知人に誘われてパラアーチェリーに出会いました。パラアーチェリーのいいところは、真ん中に当たると気持ちがいいこと、集中して楽しめること、障害があってもいろんな人が楽しめることだそうです。（小6 / 森美由紀）

応援を支えに

パラアーチェリーは50先はなれた的を狙い、矢のささった所で点数が決まる競技で、アーチェリーとは、きよりや矢の長さが違うだけです。「体が悪いことを言い訳にするのは良くない。心が折れそうになることもあるけれど、アーチェリーがあって、いろいろな人に応援してもらうことを支えにがんばっている」と話していました。（小6 / 井上晴賀）

板2枚を貫く

永野選手は20歳前後に原因不明の病気になり、左腕がまひしました。パラアーチェリーに出会い、しこうさくごし、たどりついたのが「口で弓を引くこと」。私が手で弓を引くと、とても重く、もし口で引いたら歯が折れてしまいそうでした。永野選手の打った矢はとても速く、木の分厚い板2枚を矢先がかんつうしました。（小6 / 奥津百花）



1秒間に36部という高速で印刷される新聞に驚き、カメラを向けるこども記者たち

細部までこだわって

一番驚いたことは新聞の左上に書かれている版の番号が若ければ若いほど、早く刷られたものであることが分かります。次からは気にして読んでみよ

うと思います。シアン、マゼンタ、イエロー、黒の4色から新聞ができていくのにも感動しました。普段何気なく読んでいた新聞は細部までこだわって作られていました。（高2 / 岡村雅心花）

新聞づくりおもしろい！

原料紙は北海道から

一番ところにのこったのは、しんぶんになるまきとり紙のことです。時間になると、ロボットにはこぼれて自分のいちにいくのがすごかったし、まきついている紙をのぼすと14キロもあるし、重さは一つ1トもあるからです。しかも、それが何個も、北海道から、船や飛行機でおくられてくるときいてびっくりしました。（小4 / 諸見達人）

オリンピック目指し

この会社は今年で67周年です。はしりたかとの選手もいます。さとう・りょう選手です。身長は183センチです。今はオリンピックに向けて練習しているそうです。会社の中には、お風呂やベッドもあります。一番びっくりしたのは食堂がドラマなどのさつえいに使われているということでした。（小6 / 中村美尋）

1秒間に36部つくる

夕刊を印刷しているところを見せてもらいました。とてもはやいスピードで印刷されていました。1秒間に36部もつくるそうです。ここでは40紙も印刷するそうで、中には自衛隊の新聞などもあり、面白そうだと思います。たくさんの方が協力しながら新聞をつくっていて、とても楽しかったです。（中1 / 諸見真織）

印刷会社を取材

8月21日、印刷会社（東京都）に取材に行きました。この会社は、毎日新聞の系別会社で、現在は全国に六つの工場があります。オリンピック・パラリンピックこども新聞もここで印刷しています。（小6 / 佐々木将太郎）

開いた扇がモチーフ
セレモニーには小池百合子都知事やパリンピアンなどが出席しました。初公開されたメダルのデザインは「世界に吹く風と人々の思いを束ねる意味で、開いた扇がモチーフになっています。目の不自由な選手にもわかるように点字で金、銀、銅が書かれています。いろいろな工夫がなされていて、いいなと思いました。（小6 / 井上晴賀）

東京パラリンピックの開幕1年前をPRするカウントダウンセレモニーが8月25日、東京都渋谷区のNHKホールで開かれました。セレモニーでは東京パラリンピックのメダルのデザインが初めて発表されました。（小4 / 内田悠太）

東京パラリンピック 1年前式典



こども記者と記念撮影する根木さん

車いすバスケット元日本代表

根木慎志さん

根木さんのインタビュー記事では「社会が障がいを作っている」との言葉が心に残り、質問しました。答えをしょうじく聞きました。例えばエレベーターがないビルでは、車いすの方は上の階に上がるために階段を使わなければいけません。そこで初めて車いすの方にとっての障がいが生まれて

セレモニー前に、私たちこども記者は車いすバスケットボール元日本代表の根木慎志さん(55)にインタビューしました。（小6 / 小野寺海友）



セレモニーではメダルも発表された。金・銀・銅は裏面 © TOKYO 2020

社会が障がいを作る

「社会は障がいを作っている。でも、逆に社会は障がいを作らないこともできます。根木さんは、このことを伝えたかったのではないのでしょうか。（小5 / M・U）

心のコントロール

根木さんに「ブレる時に一番大へんなど」と聞くと「気持ちです。」

小・中学校ではサッカー

根木さんは小・中学校ではサッカーをやっていたのですが、高3でけがをしてしまいました。そのときはスポーツができなくなりましたが、車いすバスケットを始めてパラリンピック・シドニー大会にキャプテンとして参加することができるようになりました。「あきらめず『できる』と思うことが大切」と根木さんは言っていました。（小6 / 久保社太郎）

シュートが決まった時

私は根木さんに聞きました。「車いすバスケットをやっている時、一番うれしいことは何ですか？」答えは「シュートが決まった時」でした。私はオリンピックもパラリンピックも、シュートがはいった時のうれしさはわからないんだなと思いました。私はこれから、パラリンピックにもきょうみをもちたいと思いました。（小4 / 洲巻文緒）

あきらめず「できる」と思うことが大切

持心のコントロールとおっしゃいました。うまくいかなかった時は心細くなって、あせって、ふんい気が悪くなるものです。そこで「だれかが『気持ちをきりかえろ』と言ってくれる、がんばろう」と思える。「思うようにいかないことを楽しむ」という根木さんの言葉が一番心にひびきました。（小4 / 内田悠太）

根木さんインタビューしてびっくりしたのは、食事を1日6回とっていること。練習するだけ食べて、夜はあまり食べないでバランスよく食べているそうです。一番うれいことは「シュートを入れた時。そして応援してもらったこと。そして心強くと話してました。車いすバスケットは難しく大変で、けがにも負けずにパラリンピック選手として活躍したことにとても感動しました。（小6 / 関根里佳）

食事は1日6回も